

研究者と巡るセメント美術

美術史研究者 坂口英伸

No.21 平塚市役所旧議事堂外壁プレキャストコンクリート彫刻

今回は平塚市役所（神奈川県平塚市）の前庭に置かれているプレキャストコンクリート彫刻《静と動》を紹介しよう（図1・2）。

現在の作品は記念碑として設置・保存されている。もともと本作は、現在の展示のような独立した作品ではなく、彫刻家の小野襄（1929—2000）が手がけた平塚市議事堂の外壁に備えられた建築装飾であった。1964（昭和39）年の建造以来50年以上を経て老朽化した議事堂と平塚市役所の建て直しに伴い、同作も取り壊される運びとなった。しかしながら、同作が長きにわたり平塚市を代表するパブリック・アートとして市民に親しまれてきたことから、その一部を記念碑の役割を担った新たな作品として保存することに決定されたという。

たとえ作品の全体ではなくその断片であっても、作品を保存する試みは、さまざまな意味でよいことだと個人的に感じる。物理的に作品（の一部）が残存することで、かつて作品が存在した事実それ自体が忘却されにくくなる効果が期待できるからだ。作品の物質的存在とその視覚的認知が人間にとって忘却効果を有するということである。もしかりにこの作品が跡形なく完全に撤去されたとしたら、かつて議事堂の外壁に作品が設置されていた事実そのものまでも忘れ去られてしまった危険性は大いに増していただろう。

本作の現在の設置場所は役所の出入口付近であり、来庁者が作品を目にしやすく、作品に近づいて表面も詳しく目視することも可能だ。作品の一部とともに写真付きの案内板も設置され、作品のありし姿を視覚的に偲ぶことができる。案内板には作品が残された理由と経緯がわかりやすい文章で記されており、この案内板の存在は大きい。

案内板によれば、旧議事堂は「窓なしスタイル」として建造され、その外壁の西面に《静》、東面に《動》とする1面120ピース（縦4ピース×横30ピース）で構成される壮大な作品（幅36m×高さ9m）だったという。制作にあたっては「モニュメンタルかつダイナミックな形態」と「制作過程の合理化とそれによる生産性及び経済性の重視」に留意し、外壁への取付工事など作業工程による影響を予測するための精密な測定用模型も制作されたとのことである。作品の保存にあたっては、形態が連続する部分のピースを条件とする取り外し工事は難航を極めたものの、西面から2ピース、東面から3ピースが活用された。実際に作品を見ると、プレキャストコンクリートの重厚さを感じさせる。かつての本作はダイナミズムと運動性にとんだ作品であったことだろう。

作者の小野は、絵画、彫刻、建築、デザインなど幅広い分野で活躍した。作品制作と並行して造形学やデザイン学に関する研究と執筆も続け、日本大学と東京造形大学の嘱託教授と

して造形教育にも関与した。そして新しいデザインプログラム「ONOJIN」も展開するなど、建築やデザインなどの分野で挑戦的な活動を展開した。

作品は「設置すれば終わり」ではない。作品の適切な維持管理には一定のコストがかかる。とくに屋外に設置された作品は、気候や大気などの環境要因の影響を受けやすく、それは作品の劣化を招く危険性も孕んでおり、定期的なメンテナンスが必要不可欠である。そしてやむをえず作品を「処分」する際にも、行政はきちんと説明を行う責任と義務をもつ。平塚市による作品を残す試みは、誠意のある対応であるともいえ、場所（建物）と作品の記憶を後世に伝えるよいモデルケースといえよう。



図1 小野襄《静と動》（一部）



図2 作品の一部と案内板